

小-20

術後残存した逸脱物質が自然退縮した椎間板ヘルニアの猫の1症例

○ 麩山洋昭¹⁾ 田村 悠¹⁾ 椿下早絵²⁾ 松田一哉³⁾ 金野 弥⁴⁾ 井坂光宏¹⁾ 上野博史¹⁾

1) 酪農大伴侶動物医療学 2) 酪農大獣医保健看護学 3) 酪農大感染・病理学

4) 酪農大附属動物医療センター

【はじめに】椎間板ヘルニアにおける自然退縮とは脊柱管内に逸脱した髄核が自然に消失する現象を示す。ヒト医療域においてはハンセン I 型椎間板ヘルニア (IVDD) の保存療法過程において、逸脱物質の自然退縮とそれに伴う症状の改善を認めた報告がある。一方、獣医療域においては I 型 IVDD の犬における自然退縮例が 1 例報告されているのみである。今回、I 型 IVDD と診断された猫の 1 例に対して外科手術を実施し、術後残存した逸脱髄核の自然退縮と臨床症状の改善を認めたので概要を報告する。

【症例】年齢不詳、去勢雄の雑種猫が突然の後肢不全麻痺と腰部痛を認め、精査治療を希望して本学附属動物医療センターに来院した。神経学的検査では両後肢の姿勢反応低下および脊髄反射亢進を認めた。単純 X 線検査では第 6 - 7 腰椎間 (L6-7) で椎間孔内の不透過性亢進および椎間腔の狭小化を認めた。CT および MRI 検査において L6-7 脊柱管内右腹側より脊髄を背方に圧迫する占拠病変を認めた。以上より I 型 IVDD のグレード 2 と診断し、背側椎弓切除術 Funkquest A 型を行った。しかしながら逸脱物質の除去は不完全であり、術後の CT 検査において圧迫病変の残存が認められた。逸脱物質の病理組織学的検査では炎症細胞の浸潤を伴う髄核の慢性的な変性を認めた。

【臨床経過】術後、本院のリハビリテーション科にてルーチンのリハビリ内容に加え、疼痛緩和および組織修復を目的として患部の電気刺激 (術後 3 日目以降) およびレーザー治療 (術後 4 日目以降) を実施した。術前と比較して姿勢反応の改善と疼痛の緩和が認められたため、術後 5 日目に退院とした。術後 7 週間目に実施した CT 検査において逸脱物質の消失を認めた。現在、術後 23 週目を経過しているが、日常生活に支障はなく良好に経過している。

【考察】自然退縮はマクロファージによる逸脱髄核の消化および貪食によると報告されている。本症例の摘出髄核における病理組織所見は、本機序が発揮される素因があったものと考えられる。また、MRI 検査においてガドリニウム (Gd) 造影により逸脱髄核辺縁が造影増強された場合、高率で自然退縮が起きると報告されている。本症例の MRI 検査では Gd 造影は未実施であり、造影増強を確認していない。今後、諸事情により外科手術が困難な症例においては、造影 MRI 検査により保存療法による良化が期待できるか否かの判断基準になるかもしれない。獣医療域における自然退縮の報告例は少なく、より検討を重ねる必要性がある。